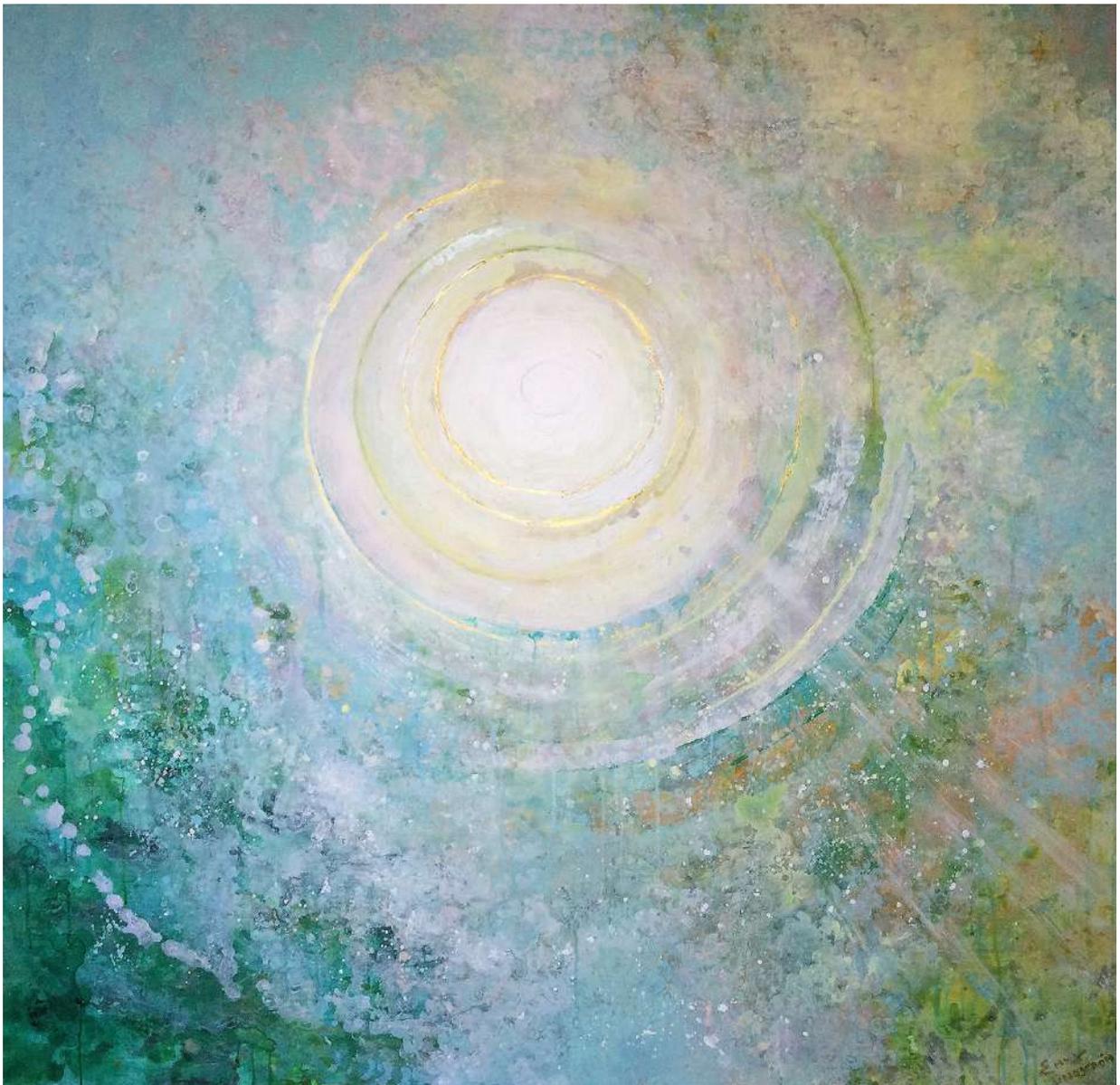

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 115

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2281. 新たな出発の連続
- 2282. 日記の編集と仕事の尊厳
- 2283. 些細な気づきの連続
- 2284. 連続する三つの夢: 古城にて
- 2285. 厳しい寒さの中で見出すもの
- 2286. 人生を導く存在について
- 2287. 刹那瞬と人生の節目
- 2288. 音楽言語と発達思想の系譜
- 2289. 如性に根ざした生き方について
- 2290. 自己の不滅性と縁起への関与
- 2291. 経済戦争に参画する夢
- 2292. 白い光で構成された書物
- 2293. 縁起を通じて生きること
- 2294. 真善美を通じた生き方と関与
- 2295. 日記を綴ること・作曲すること
- 2296. 日々の充実
- 2297. 変奏的な発達プロセス
- 2298. 終わりからの始まりとライフワークについて
- 2299. 船旅の価値と日欧の文化の深さ
- 2300. サン=サーンスの音楽と差異について

相変わらず木枯らしにも似た風が吹いている。季節は本来春に向かっているはずなのに、初冬のような感覚が引き起こされる。しかし、優しい太陽の光が天から降り注いでいることには感謝しなければならぬだろう。

この太陽があれば、私は前に進めるような気がする。いや、仮に太陽が雲に覆われて見えなかったとしても、雲の向こうにある太陽の存在を常に知覚できている。そして何より、自分の内側にある太陽の光と熱量が途絶えることはもうない。欧州での生活でもたらされたのは、内側の太陽の発見であり、太陽として生きることなのだ。そんなことをふと思う。

今日は午前中に、本当に素晴らしい出会いをさせていただいた。オンラインを通して知り合いの方から、この現代社会に対して非常に意義のある活動をされていらっしゃる方たちをご紹介いただいた。お話いただいたプロジェクトを通じて社会に関与していくことに加え、プロジェクトの進捗と成果を学術論文の形にまとめて公開していくことも含め、私にできることをもとにこのプロジェクトに参画させてもらえれば幸いだ。

欧州にやってくる前後から、私の人生が何か大きなうねりを伴って動的に動いているように思っていた。欧州での生活が二年目に入ってから、そのうねりのダイナミズムが増しているように思う。私自身は、克己と規律の中で粛々と日々を送っているだけなのだ。そうであるにもかかわらず、人生がより動的な様相を帯びつつある。

それは非常に肯定的な意味においてである。人々との出会いが起点となり、この社会への関与の姿勢が自分の内側で醸成されていき、それが実際の行動を伴って具現化され始めている。探究活動と社会参画というのは二項対立のものではなく、最初から一つであったのだ。探究活動だけを行うという、自己肥大化が生む病理から脱却し、社会参画だけを進めていこうとする偽善的態度を超えて、それらのどちらにも従事する形で、いやそれら二つをさらに一段上の次元で捉える形で一つの統合的実践として日々を生きて行く。そうした生き方が徐々に実現されていることを実感する。

オンラインでのミーティングの後、毎日行っているように、過去に作った曲を一曲だけ聴き返していた。その曲を聴きながら、出発の連続という人生の本質について思いを馳せていた。私たちは今日

も新たな旅立ちを経験している。新たな旅立ちではない日など存在していないのだ。新たではなかった日を探してみて、それが見つかるだろうか？きっと見つからないだろう。日々は常に新たな出発なのだ。

裸の街路樹の枝に止まっていた一羽の小鳥が大空に向かって飛び立った。フローニンゲン:2018/3/17(土)11:46

No.881: Serenity after Nostalgia

I often feel serenity after nostalgia. Although it is still cold in Groningen, spring will come soon.
Groningen, 08:02, Thursday, 3/22/2018

2282. 日記の編集と仕事の尊厳

先日、とても有り難い連絡を受けた。ある方から日記を読んでもらっているという趣旨の連絡だった。確かにこのように日記を公開しているのだが、日記という本来の特性上、私は他者に向けて一切日記を執筆していない。しかし、究極的なまでに個人的な実践のその先に、普遍的な領域への道があることが分かりつつある。

私が日記を書き続け、それを公開しているのは、森有正先生が数十年前に執筆した日記に私自身が大きな励ましを得たように、数十年後の誰かに向かって何かを伝えようとしているからなのかもしれない。そう考えると、この日記は全くもって他者を意識していないとは言えなくなる。

日記という表現形式が持つ意義と力には日々考えさせられてばかりであり、同時に、私はその恩恵を存分に受けている。毎日小さな実践を積み重ねていくのと同じように、日記についても今後も継続していきたいと改めて思う。

その方からの連絡を受けて、久しぶりに自分の過去の日記を読み返し、編集作業を行っていきたいと思った。欧州に来た頃は定期的に日記の編集を行っていたのだが、いつからかそれを行うことをしなくなった。もちろんその理由としては、学術研究と協働プロジェクト、そして作曲実践などに時間を充てたいという思いがあったことが挙げられるかもしれない。だが少し前に、この夏の休暇を利用して、一気にこれまでの未編集の日記をまとめていきたいと思っていたところだった。

夏を待つのではなく、これを機会に、今日から少しずつ過去の日記を読み返し、編集作業を行ってみたいと思う。過去の日記から触発されること、考えさせられたことなどを、また新たな日記として書き留めていく。あるいは、過去の日記の追記として考えをまとめておくのもいいだろう。とにかく、今日からまた過去の自分の日記を読み返し、それを起点にして前に進んでいくということを行っていきたい。

結局今日の午前中はオンラインミーティングをした後に、以前作った曲を聴き返し、日記を少し執筆するだけで時間が経ってしまった。見方を少し変えてみると、そこにも何物にも代えがたい充実感が存在していることに気づく。縁によって繋がった方たちとの対話と協働や創造的な実践に従事しているということ以上に何かを望む必要はあるのだろうか。

そろそろ昼食の時間が迫ってきている。窓の外をぼんやりと眺めていると、数日前にフローニンゲンの中心街を歩いていた時のことを思い出した。厳密には、中心街から自宅に帰っている最中のある出来事について思い出していた。街の中心部から自宅に向かっている最中の道路で、何やら工事が行われていた。

工事をしている道路の上を通ることができるように思われたので、私は特に何も気にせずに道路を歩いていた。すると、二人の工事員の男性が道路にレンガのタイルを並べている光景が見えた。私は二人の後ろから前に向かって歩いており、ちょうど彼らの横に差し掛かった時にオランダ語で一言挨拶をした。私は全く気にもせず、彼らが並べているレンガの横を通るように歩き続けようとした。

すると、二人がオランダ語で私に向かって何かを注意するような言葉を発した。その意味が正確にはわからなかったのだが、その道は通ってはいけないことになっており、今からレンガを並べる道の上に足跡を付けないで欲しいというような内容だったように思える。もう私は何歩も歩みを進めていたところだったので、大変申し訳ないことをしたと思った。せっかくならした道の上を私が歩いたことによって、彼らの仕事を増やしてしまったように思えたのである。

さらに、彼らがせっかく整備した道の上を歩いたことは、何か踏み絵を踏んだような気持ちを私に引き起こした。この一件から、人間の仕事に潜む尊さのようなものを実感していた。一人の人間が行う

仕事には尊さが内包されており、その尊厳を傷つけてはならないということを考えさせられるような出来事だった。フローニンゲン:2018/3/17(土) 12:19

No.882: Being Derivative

I didn't know that even Shakespeare took a number of plots from previous writers. He might have been creative to generate something new from something old. I'll keep the current practice to be intentionally derivative for music composition. Groningen, 18:20, Thursday, 3/22/2018

2283. 些細な気づきの連続

昨夜未明からの激しい風が随分と収まり、今はゆったりとした風がフローニンゲンの街を吹き抜けている。今の住居で生活をして一年半が過ぎたというのに、なんと今初めて気づいたことがある。書斎の窓から赤レンガの家々が見え、その奥には高速道路のようなものがある。それについては前から知っていたのだが、今初めて知ったのは、その道路の手前側に線路があり、列車が走っているということだった。

二両編成の赤い列車がたった今右から左へと走りすぎていく姿を目撃した。どれだけ狭い範囲で自分が生きているのかを改めて知る。人間というのは物理的にも精神的にも、実に狭い範囲で日々の生活を営んでいるようだ。以前、ネットワーク科学者の研究論文を読んだ時に、たいていの人々は決められたネットワーク経路の中を毎日生きているようだ。

私の認識世界の中に、自宅から目と鼻の先にあるその鉄道はこれまで存在しておらず、自分の認識世界が非常に限定的なネットワーク経路を持っていることがここからもわかる。ハッとさせられるような気づきは、今日はその他にも二つほどあった。一つには、数日前に、三月の初旬に何か日本の祝日があったことを思い出そうとしていたのだが、それが何か結局わからず、調べもしない状況にあった。

本日作曲した曲に偶然「ひな祭り」と命名したところ、そういえばひな祭りはこのあたりの季節に行われるものではなかったかと思い調べてみたところ、三月三日はひな祭りだったようだ。これはまた今日のハッとするような気づきの一つであった。ひな祭りについて考えながらフローニンゲンの空を眺めていると、どこからなしに、ひな祭りのあの歌が脳内に流れてくる。

それともう一つ、先ほど一週間分のカレーを作っている最中、何かしらの発達現象に関する理論モデルを数理モデルに変換した際に、なぜモデル内の変数をかけ算の演算記号でつなぐのかについてハッとするものがあった。なぜ変数を足し算ではなく、かけ算の記号を用いて連結させるのかについては、前々から何か引っかかるものがあった。もちろん、モデルによっては変数を足し算で連結させるものもあるが、私がこれまで見てきたものは大抵かけ算の記号を用いて変数を連結させていた。

端的には、発達現象を生み出すそれらの変数が相互作用をしているため、それが足し算ではなくかけ算である必要があるのだと気付いた。例えば、足し算の記号で二つの変数を結び付けようとすると、片方の変数の影響がもう片方の変数に直接的な影響を与えない。しかし、発達現象を構成する変数は大抵の場合相互作用しているものであるから、それをかけ算の記号で連結させる必要があるのだ。数理モデルに関する理解についてはより理解を深めていく必要があり、演算記号の本質についてもさらに考えていく必要があるだろう。

思考が拡散的になったり統合的になったりするが、今日はこのような思考状態がもう少し続きそうである。フローニンゲン:2018/3/17(土)16:55

No.883: Jazz and CRQA

Although I'm not so captivated by jazz, I'm intrigued by a synchronization phenomenon that occurs during improvisation in jazz. The phenomena can be investigated by cross recurrence quantification analysis (CRQA). Groningen, 20:00, Thursday, 3/22/2018

2284. 連続する三つの夢:古城にて

今朝は六時半に起床し、七時前から一日の活動を開始した。今日一日がまた充実したものになるであろうということがすでにわかる。そんな日曜日の始まりだった。今日は昨日に引き続き、風が少しばかり強い。今目の前に見える裸の街路樹の枝が左右前後に幾分激しく揺られている。

小鳥の鳴く声も聞こえず、どこか閑散とした様子がする。そして何より、今の気温は低い。天気予報を確認すると、今日は一日を通して晴れのようなのだが、最高気温は2度までした上がらず、今の気温はマイナス4度である。薄い薄紫色の早朝の空に引き寄せられる形で書斎の窓の方に行ってみると、道路の両脇が霜か何かで白くなっていた。今朝のフローニンゲンはそんな様子を見せている。

今朝方の夢の断片的な記憶がうっすらと蘇ってくる。夢の中で私は、ヨーロッパ風の城のような建物の中の一室で一人の女性と一緒にいた。どうやら私たちは何かについて一緒に勉強をしているようだった。その部屋は作りがとても洒落ていて、天井も高く、開放的な窓からは城が立っている周りの大自然を眺めることができる。

私たち二人が勉強を続けていると、突然外が暗くなり、見る見るうちに黒い雲が空を覆った。そして、突然雪が激しく降り始めた。部屋の温度はみるみる寒くなり、吹雪く雪の轟音が聞こえて来る。部屋の温度があまりにも寒くなったことを不審に思った私は、開放的な窓の上を眺めると、そこにある細長い窓が開いていることに気づいた。

私はすぐさまその窓を閉めるために備え付けのレバーのようなものを回した。程なくして全ての窓が閉まり、部屋はまた少し暖かくなった。だが今度は突然部屋の中が真っ暗になった。それは停電ではなく、外の吹雪の闇がより濃さを増したためであった。

私は部屋にいる女性に心配ないと声をかけ、部屋の明かりを灯すスイッチを探しに入口の方に向かった。スイッチを無事に見つけることができ、それを押すと、部屋の中が一気に明るくなった。部屋全体が黄色の光に包まれた時、優しさと暖かさの二つを同時に感じて私は安堵した。ここで夢の場面が少し変わった。

次の夢の場面でも、相変わらず同じ城にいたことは確かである。そこでは、早めの昼食を摂ろうと思い、一階のダイニングホールに降りていった。見ると人はほとんどおらず、食事を摂ろうとしているのは私だけのようなだった。どうやらこの時間帯は、朝食にしては遅すぎであり、昼食にしては少しばかり早いようだった。

ダイニングホールではビュッフェ形式で食事を選ぶことができるのだが、私が目的にしていたメニューがそこになかった。栄養バランスの取れたきちんとしたメニューではなく、そこにはパンやケーキなどしか置かれていなかった。通りすがりのスタッフに話を聞いてみると、やはり時間帯が悪かったようだ。仕方なく私は、いくつかのパンと一つのケーキを皿に乗せ、コーヒーを入れてその場で食事を摂ることにした。そこでまた夢の場面が変わった。

最後の夢の場面も、この城の中の出来事だった。この城には、巨大な図書館が備え付けられている。図書館の中で私は、大学時代の先輩と一緒に勉強をしていた。その先輩は私と学部が異なり、年齢も一つ上なのだが、在学中はよくしてもらったのを覚えている。

図書館の中にはおびただしいほどの蔵書があり、同時に無数の利用者が館内にいた。その先輩と私は空いている机を探し、黒い光沢を発している品の良い木彫の机で勉強することにした。しばらく勉強した後、先輩と共に図書館を後にすることにした。私は三冊ほど借りたい書籍があったため、先輩を少しばかり待たせる形で、図書館の入り口付近にある受付で本を借りようとした。

受付:「こちらの三冊ですね。325円になります」

私はその言葉を聞いて、すぐにお金を支払おうとしたが、無料で借りれるはずの書籍が有料であることに気づき、少しばかり戸惑った表情を見せた。

受付:「こちらの一冊だけ無料で借りることができず、325円になってしまいます」

その女性が指差す書籍を改めて見てみると、先週か先々週に借りたばかりの本だった。連続して同じ人間が同一の本を借りようとするとならざるを得ない、と私は勝手に解釈した。

その本をつい先日を読んだことを思い出したので、とりあえず私はその本を借りることをせず、二冊だけ借りて、先輩と共に図書館の入り口から外に出た。入り口の外の世界は、とても開放的な空間が広がっていた。フローニンゲン:2018/3/18(日)07:16

No.884: Meaning of Beauty

I want to investigate the developmental process of meaning of beauty. I'm captured by meanings of human experience. My main focus would be aesthetic experience in the domain of music.

Groningen, 20:29, Thursday, 3/22/2018

2285. 厳しい寒さの中で見出すもの

日曜日の始まりはとても静かで穏やかである。今、朝日が目の前の赤レンガの家々を照らしている。その家々の中では確かに生活をしている人たちがいるのを私は知っているが、どこか人気を感じさせず、こちらから見ると、それらの家々がどこか一つの芸術作品のように思えてくる。

今朝はやはり寒いので、湯たんぽを使って下腹部や腰を温めることにした。結局五月末までマフラーと手袋を着用していた昨年のように、今年も暖かくなるのはまだまだ先のようなのだ。先週に一度暖かさを感じていたが、それはまだ完全な春の到来を示したものではない。来月にワルシャワとブダペストに訪問する予定があり、ワルシャワとブダペストの今の気温を調べてみると、フローニンゲンとほとんど変わらないようであった。ワルシャワに至っては、フローニンゲンよりも気温が低そうである。

こうした寒い日々が続いていても、私の毎日は本当に充実感と幸福感に満ちている。生の歓喜の頂点を通じて生きるというのは、これほどまでに静かな充実感と幸福感が自然と滲み出てくるものなのだと思える。

外の世界は過酷な寒さを呈しているが、私は何かを信じているのだと思う。特定の何かというよりも、内側の世界と外側の世界が交差する地点に存在する何かを信仰する心が自分の中で生まれつつある。それを信仰している自分は、とても敬虔な気持ちになる。私はもう多くのことを求めようとしない。この世界からの促しと励ましがあれば十分ではないだろうか。そうした促しと励ましを通じて生きること以上に、何を望むことがあるのだろうか。

今しがた、小鳥の鳴き声が聞こえてきた。それを聞いて少しばかりホッとした気持ちになり、同時に心が明るくなるのがわかる。これもまた世界からの促しと励ましの一つの形に違いない。裸の街路樹の枝は相変わらず風に揺られている。

今日は日曜日ということもあり、これからまず最初に作曲実践に取り掛かる。昨夜の段階で作りかけのものが一曲あり、それをまずは完成させ、もう一曲新たに作ろうと思う。小さな作品を無数に作っていくことの中で、一つずつ自分の作曲技術を高めていく。その過程の中で、自分の音楽的な感性が涵養されれば何よりだ。

作曲実践の後、成人発達に関する専門書の続きを読み進めていく。この専門書を数章ほど読み進めたら、今日は森有正先生の全集のある一巻を読み進めたい。こうした読書の合間に、六月にロンドンで行われる学会に向けた書類の作成を行っていく。今日の過ごし方はそのようになるだろうか。

溢れる充実感と幸福感の中で日々の小さな活動を少しずつ前に進めていくこと。それ以外に自己を深める道もこの社会への深い関与が実現される道もない。フローニンゲン:2018/3/18(日)07:41

No.885: Contact with Myself through Making Music

Making music enables me to contact with my inner self. In other others, it liberates myself in a profound way. Music composition is practice for our liberation. Groningen, 21:00, Thursday, 3/22/2018

2286. 人生を導く存在について

今日は部屋の中にも本当に寒い。暖房の設定もほぼ最大にしているのだが、それでも底冷えするような寒さである。空には雲がほとんどなく、青空が広がっており、太陽がフローニンゲンの街全体を包んでいる。この太陽の光があるおかげで、寒さも少しは軽減されているのかもしれないと感謝すべきかもしれない。

相変わらずの寒さであるが、午前の途中から小鳥の合唱が聞こえ始めた。外に流れる小鳥の合唱に耳を傾け、同時に室内で流れているラフマニノフの音楽にも耳を傾ける。世界は音楽で満ち溢れている。昨日から今日にかけて、なぜだかずっとラフマニノフを聴き続けている。13時間半にわたるピアノ曲集であるため、今日もこれからずっとラフマニノフを聴き続けることになるだろう。

今日もまた、人生の新たな一日が始まった、と今朝方思った。それは自己の新たな出発を意味しており、今日もまた人生について新たな意味を見出すことを表している。新たな意味の創出と絶え

ざる出発を経験しながら、人はゆっくりと進むべき方向に導かれるようにして歩いていく。まさにそれは、対象に向かっていくというよりも、対象からの投げかけによってこちらが導かれていくかのような現象だ。

何か自分の理解の範疇を超えたものが自分を導いている。そんなことを先日も思った。私の内側に、どこかに向かって進もうとする意思を超えたところに、私をどこかに導いていく力を感受するような感覚が生まれつつあるのを実感する。これまでの人生を振り返ってみた時に、人生の転機になるような決断の際には、私を導いてくこの力が常にあったように思う。

日本を離れて米国に行ったこともそうであり、オランダに来たこともそうであった。人間発達の探究を始めたこともそうであり、作曲を始めたこともそうであった。全てが自分の意思だけに基づいてなされたことではなかった。それよりもむしろ、自己の意思を超えた導きがどれほど多大な影響を自分の人生に与えてきたかについて思う。

自己を導く誘導因に対する感謝の念が増すほどに、それは自然な形で私をまたどこか別のところに導いていく。これから私がどこで何をするかは明確なものではない。当然、自分の中では目の前のなすべきことは見えている。しかし、そうした目の前の事柄を超えた人生の出来事については、もはや正確な予想などできるはずはない。

自分の人生を導いていくこの力に自己を委ね、その中で小さく日々の行為を積み重ねていこうと思う。小鳥たちの合唱が突然激しくなり、フィナーレを迎えた。彼らもまた何かの導かれている存在であり、同時に私を導く存在でもあるのだろう。フローニンゲン:2018/3/18(日)12:20

No.886: Daily Scintillation

Not overlooking scintillation within any daily phenomena is one of the most important ways of my living. Are you aware of any glitter underlying daily trivial events? Groningen, 09:17, Friday, 3/23/2018

今しがた昼食を摂り終えた。昼食を食べることに意識を集中させていたためか、食卓の窓から見えていたはずの景色について何一つ覚えていない。大きな窓から外の世界が見えていたはずなのだが、そこで見ていたものや聞いていたはずの音などが記憶に残っていないのだ。昼食後、食器を洗いながら、善く生きるためには善く死に向かうとはどういったことなのかを考える必要があると思った。

私にとってそれは、絶えず日記を書き続け、死期が迫る日々の中で、この人生を通じて執筆した過去の日記を振り返り、出会った全ての人と遭遇した出来事の全てに対して心から感謝の念を捧げることなのかもしれない。読むこと、文章を書くこと、曲を作ること、学術研究をすること、協働プロジェクトに従事すること。それらを通じて日々が過ぎていく。とても静かに、かつ着実に日々が過ぎていくのだ。

目の前の裸の街路樹に一羽のカラスが止まっているのが見える。特に何かをするわけでもなく、キョロキョロと頭を振りながらこの世界を見渡している。カラスが飛び立つまでそのカラスを見つめていようと思った。ふと私は、カラスの次の行動が何であり、それがいつ起こるのが全くわからないことに気づいた。

自分の意思とは関係のないところで動く世界についてはたと知る。次の一瞬に何が起こるか予想のつかないこの世界に自分は生きている。それは、カラスの行動のみならず、もしかすると自分の行動ですら本当のところは自分は何もわかっていないのかもしれない。絶え間なく続くこの一瞬。

次の瞬間に何が起こるか予測がつかないというのは、やはり私がこの今という瞬間の中だけに生きていることを暗示しているかもしれない。絶え間なく続く今。結局そのカラスはしばらく経ってもその場を離れなかったが、一瞬目を離したすきに、カラスはもうどこかに飛び立っていた。こんな結末を迎えるとは数分前の私には予想できなかったことである。

カラスがそのタイミングで飛び去ったことは、私にとって思わぬことであった。こうした思わぬことが自己を取り巻く内外で起きていることにもっと敏感になる必要があるだろう。これまでの私は、そうした

感性が鈍感でありすぎたのだ。未だ開かれぬ感性が自分の中にあることを知っている。これからはそれらを少しずつ開いていこう。

一昨日、インターン先のオフィスから自宅に戻っている最中、学術の世界のみならず、ビジネスの世界と芸術の世界に毎日自己を置いている自分がいることに気づいた。そこでふと、企業社会で生きている人たちのマインドはつくづく特殊であり、芸術の世界で生きている生きている人たちのマインドも同様に特殊であることに改めて感心を持った。

言い換えると、彼らの特殊な思考特性についてより知りたいという思いが強くなったのである。そうした思いから、自宅に帰ってすぐに、まずは本棚から“The Executive Mind (1983)”という幾分古い専門書を取り出した。これはタイトルの通り、経営理論と発達理論を架橋させる形で、企業のエグゼクティブたちの思考特性について解説している書籍である。現在の私は、主に企業社会のマネージャーの思考特性や能力に焦点を当てた協働プロジェクトに従事することが多い。

しかし直感的に、今後はエグゼクティブ層の思考特性や能力に関する協働プロジェクトにも従事する予感がしていたのである。エグゼクティブに加え、芸術家、とりわけピアニストや作曲家の思考特性や能力についても探究を進めていく機会が近い将来に得られるような気がしている。そうしたことから、昨日は芸術家の思考特性に関係するような書籍を五冊ほど購入した。一見すると、ビジネスの世界と芸術の世界はかけ離れているようだが、私にとってはそれらの領域がどちらも共に重要なものとして立ち現れており、片方だけに関与することはできない。

二つの領域に関する学術研究と協働プロジェクトを同時に進めるような日々が近々訪れそうである。今また、人生の節目のようなものを感じている。フローニンゲン:2018/3/18(日)13:16

No.887: A Process and Stage

We may be a process on a stage, and the stage is the context for us. When the context changes, we change. The interesting thing is that we can alter the context when we change because both of them are interconnected and because a process is not subordinate to a stage. Groningen, 15:23, Friday, 3/23/2018

今週全体を振り返ってみると、やはり充実感に満ちたものであったように思う。興味深いのは、今週の充実感先週のそれとは少しばかり質が違うことである。これは毎週感じることである。その差はごくわずかであり、かろうじて認識できるかどうかの微細な差なのだが、毎週感じる充実感質的に異なっている。それは単に種類が変化しているというよりも、より深まる方向に向かっている。

今日も一日が夕方に向かい始めた。夕方の四時を過ぎた時間は、フローニンゲンにおいて最も気温が上がる時間帯である。今朝はとても寒かったが、今は部屋の中が西日で暖かくなっている。書斎の窓のカーテンを開けておくと西日がきついため、今はカーテンをそっと閉めている。カーテン越しに太陽の暖かさを感じながら、この夕方の時間を過ごしている。

朝から相変わらずラフマニノフの音楽を聴き続けている自分がいる。先ほどハタと仕事の手を止め、ラフマニノフの曲に聴き入る瞬間があった。なんと表現したらいいのかわからないが、ラフマニノフが曲を通じて言わんとしていること、つまり彼が何を表現しようとしたのかが直感的にわかるような体験をした。これはとても不思議な体験だった。

このロシア人作曲家が作った曲を日本人の私がわかるというのは、どういうことなのだろうか。ロシア語のわからない自分でも、ラフマニノフが言わんとしたことがわかるというのは実に不思議なことではないだろうか。異なる自然言語を母国語に持っていながらも、ラフマニノフの音楽に共鳴することができた自分について考えている。この現象の背後には、やはり音楽言語が持つ普遍性という特質があるのかもしれない。

音楽言語には、人間の本性に根ざすものを共鳴させるような力が秘められている。作曲というのはまさに、人間に普遍的に妥当する感情や感覚を表現することを可能にする媒体なのだろう。こうしたことを思うとき、なぜ私ができるだけ日本語で日記を書きながらも、同時に作曲行為を通じて自分の内的体験を表現しようとしているのかがわかったような気がする。学術研究に従事している限りは、私は英語で論文を含めた文章を執筆し続けるだろう。

だが、最後に残るのは日本語を通じた日記と、音楽言語を通じた作曲なのではないか、という考えが突如芽生えた。その日がいつやってくるのかはわからないが、日記と作曲が残り、日記的作曲と作曲的日記だけが私にできる唯一のことになる日が訪れるかもしれない。

これからまた少し書籍を読み進めていく。先ほど、人間発達に関する専門書を読んでいた時、ベルグソンの思想に関する記述に目が止まった。どうやらベルグソンは、発達現象に内在する力を見事に見抜いていたようなのだ。ベルグソンは、発達の過程で生じる個性化と複雑性の増加現象を見抜いており、個性化と複雑性の増加には絶えず脆弱性や危機が含まれていることすらも見抜いていた。この洞察は見事だと思う。

改めて、ベルグソンを含め、アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド、ピエール・テイヤール・ド・シャルダン、ジェーン・ゲブサー、ジェームズ・マーク・ボールドウィン、クレア・グレイブス、ヨルゲン・ハーバマスの発達思想について、腰を据えて学び直しを行おうと思う。フローニンゲン:2018/3/18(日)
16:41

No.888: Interest in Philosophy of Science

Once I obtain a doctoral degree about human development, I want to delve into the domain of philosophy of science. In particular, my main focus will be the justification of psychological research and the exploration of new ways of research in the field of developmental science. My philosophical underpinnings would derive from complexity science—system science and network science. Groningen, 15:29, Friday, 3/23/2018

2289. 如性に根ざした生き方について

如性。「あるがまま」ということについて新たな意味の展望が開けた。

夕食時のフローニンゲンの空は、オレンジとライトブルーがグラデーションを成した自然美を体現させていた。昼食時に私は食卓の窓から見える景色を注意して見なかったため、夕食を取っている最中は夕暮れ時の外の景色を意識的に眺めていた。その時ふと、如性に関して新たな意味がもた

らされたのである。如性というのは、単にあるがままなのではない。言い換えると、如性を通じて生きるというのは、単純にこの世界の全てを受け入れるだけでは不十分なのだ。

食卓の窓を通じて、小鳥が何か餌を見つけたらしく、それを食べている姿が目にはいった。仮にその餌が何らかの生物であったならば、小鳥に食べられることによって、その生物は死滅したことになる。そして、その餌のおかげで小鳥は生命を維持することができたことになる。私たちを取り巻く世界では、このようなことがありとあらゆる場所において絶えず起こっている。

自然界のみならず、人間界においても、諸々の社会的な出来事がこの瞬間に世界の至る所で生じている。それは大小を含め、もはや無数の出来事が起こっていると言っても過言ではない。こうした社会的な出来事そのものは、自然界において小鳥が餌を食べたのと同じように、実は生じては消えていく単なる現象に過ぎない。しかし、私たちはそうした現象に意味を付与し、リアリティを持たせる形でこの世界を生きていくことを宿命づけられている。

つまり、私たちがこの社会で起きている諸々の出来事を一つの出来事として認識するためには、意味を付与するということが行なわれているのだ。ここで「ありのままに生きる」という言葉を掲げ、この世界で起こっていることをなすがままに放置するのは、真の意味で如性に基づいて生きることではないのではないか、という考えが生じていた。

私たちは、社会的な出来事を認識した瞬間に、その出来事に意味を付与する形ですでに関与していることになる。仮に私たちがこの社会の問題を認識し、それをあるがままにしてしまうことは、単なる問題からの逃避ではないだろうか。繰り返しになるが、この社会における出来事は、私たちが意味を付与することによって具現化するという性質を持っている。そして、私たちが付与する意味というのは、本来絶えず刷新されることによって発展を遂げていくものなのだ。

仮にあるがままを標榜して、この社会現実から目を逸らしてしまうことは、絶えず意味を刷新していくという私たち人間の如性に反した行為だと思うのだ。この世界に蔓延する傍観者的な態度はなんだろう。人々は如性というものを曲解する形で生きているのではないだろうか。この世界で起こっていることは本当に、小鳥が餌を食べた行為と何ら変わることがない。

しかし、ひとたび私たちがある現象に意味を付与することによって社会的現実を作り出した瞬間に、その現象は大きな意味を持った出来事として立ち現れる。その瞬間、真に如性を通じて生きているのであれば、私たちはその出来事を傍観することなどではしなないと思うのだ。なぜなら、その出来事がどのような性質を持っているにせよ、それらは絶えず意味を刷新することを私たちに突きつけているからである。

この現実世界において真にあるがままに生きるというのは、現実世界で生起する意味の刷新に積極的に関与してくことなのではないだろうか。この社会の出来事に付された意味を積極的に作り変え、新たな意味を紡ぎ出していくことが真の如性に根ざした生き方なのではないだろうか。フローニンゲン:2018/3/18(日)19:53

No.889: Final Day of the Internship

This is the final day of my internship. I'll wrap up my analysis and start to write the final report. Because a meeting to report the results of my analysis will come soon, I'll prepare for making a succinct summary of the results. Yet, the report should include every necessary information so that my supervisors can understand the meaning of the results.

In the afternoon, I read some articles to bolster my claim to choose standardized dispersion analysis instead of detrended fluctuation analysis. These articles would be useful not only for this internship but also for my thesis. Groningen, 17:37, Friday, 3/23/2018

2290. 自己の不滅性と縁起への関与

—人間には、木の実が実って、自然と地面に落ちるような、その人に固有の豊かな死が存在する—
リルケ

夜の八時を迎えた。日曜日が静かに終わりに向かっていくのを確かに感じている。今日は一日を通じて、ほぼ全ての時間を読書に充てていた。何時間読書に没頭していたのかわからない。心の眼が見開いて、何か真理を強く希求するような状態に自分がいたのを覚えている。このところ、心の眼が大きく開いているのを強く実感する毎日が続く。

果たして、今日自分は何をしたのだろうか？という問いが自然と浮かぶ。上述の通り、一日を通して読書に没頭していたというのは、今日の自分の行動を確かに言い表している。読書に並行する形で日記を書き、作曲実践を行っていた。何か成したことがあったとすれば、それぐらいだろうか。

こうした諸々の行為がこの世界とどれだけ密接に関係しているか、あるいは世界への関与はいかほどなのかというのは、最近の私が強く意識している点である。意識しようとしなくても、それは向こうの方から問いとして自分に突きつけられてくる。この世界への関与と自己の永続性について再び考えている自分がいた。とりわけ、自己の永続性について考えている時、また少し意味の表皮が剥がれた。

結局、自分という一人の人間はいつか身体が朽ち果てる。それに伴って、やはり意識というものも消滅するだろう。それでは一体、自己の何が永続しうるのかについて考えていた。もしかすると、私がこれまで抱いていた、自らの成した仕事や形として表現したことが永続するというのは幻想、もしくは幾分自己肥大化した物の見方だったのかもしれないと思うに至った。

確かに、例えば学術論文や書籍、あるいは日記や曲として形になったものは、もしかしたら今後長い時間残っていくものなのかもしれない。しかし、それが未来永劫に残る保証など、どこにもない。この考えに幾分納得しながらも、それでいてどこか納得のいかない自分がいたことは確かだ。そこからまたしばらく考えていると、自らが形として生み出したものは、もしかすると長大な時間の流れの中でいつか風化してしまう可能性があることは認めることができた。

一方で、自己の何らかが永続するという考えを放棄することができなかつた私は、そこでまた新たなことに気づいた。結局、自己が消滅し、仮に自己が形として表現したことが消滅したとしても、自己が生きた過程及び自己が何かを形として表現した過程において生じた縁起は消滅しないのではないかと、という考えが現れたのである。すなわち、自己がこの世界で生きたことを通じて生まれた縁起の連鎖は未来永劫消滅しないのではないだろうか。自己が関与した縁起それ自身と自己の関与によって新たな方向性と力を持った縁起は、自己が消滅したとしても未来永劫にわたって続いていく。

人間として生きることの大切な意味の一つは、未来永劫にわたって続いていく縁起への関与にあるのではないだろうか。自己の魂が不滅だとするならば、自己の魂とは一個人の所有物ではなく、この世界の縁起そのものに他ならないのかもしれない。なぜなら、縁起そのものは、一人の人間がこの世を去ったとしても絶えず存在し続けるからだ。生きることにする意味が新たな展望として開けてくる。生きることの実感がまた強まっていく。生きることの歓喜がまた自分の内側から湧いてくる。生きることの充実感と幸福感が満ち溢れてくる。

自己が消滅した後に、その自己が関与した縁起が必ず存在し続けるということがわかり、なんとも言えない安堵感が自分を包む。自己の不滅性というのはそういうことだったのだ。

落ちる実がある。実が落ちるための場所がある。落ちた実を拾う人がいる。

私たちの営みはそうして続いていき、私たちの存在はそうして不滅となる。フローニンゲン:2018/3/18(日)20:17

No.890: In the Affectionate Morning

Although it is cloudy today, I can feel affectionate in the morning. A crow on the tree on the street looks like feeling the same tenderness from the morning. Groningen, 08:09, Saturday, 3/24/2018

2291. 経済戦争に参画する夢

七時前に目覚めてみて驚いたが、もうこの時間帯はすでに辺りが明るくなっていた。日の出の時間が早くなり、太陽の動きに関してはもう長い冬を抜け出したように思う。

今日のフローニンゲンの空は雲ひとつない快晴である。透き通ったライトブルーの空がどこまでも遠くへと伸びている。この土日においては風が強かったが、今日は風が収まっている。目の前に見える裸の街路樹の枝は全く動いていない。今それが揺れる瞬間があったが、二羽の小鳥が休憩に来たためである。

今日はなんとも穏やかな天気だ。あとは気温さえ上がってくれば、完全に春が来たとみなすことができるだろう。今の気温はマイナス4度であり、昼頃にマイナスの世界を抜ける。

今朝方見ていた夢の記憶が断片的になっているが、夢の中で私は欧米諸国のどこかにいた。あるひっそりとした街の、人通りの少ない一角に私は生活拠点を設けていた。家の隣は酒屋のようであり、一見すると騒がしいように思えるが、全くもって逆である。その店は落ち着いた酒屋であって、常連客だけが時折やってくるような店だった。

その酒屋の横に私の住んでいる家がある。どんよりとした空が立ち込めている中、私は自宅のドアを開けた。するとそこには、米国西海岸時代にルームシェアをしていたスコットがいた。スコットがとても陽気そうに私に挨拶をした。普段は無愛想なスコットのそうした陽気な姿に一瞬戸惑いながらも、私は挨拶を返した。その家には地下に続く道があり、地下には浴槽付きのシャワールームがある。

私はシャワールームに真っ先に向かおうとしていたのだが、突然、自宅とは別の建物の最上階に飛ばされていた。そこには大きな部屋があり、数十名の人たちがコンピューターとにらめっこしながら何かの作業を進めている。米国人らしき一人の男性が私に声をかけてきて、「この世界の経済市場の操作を頼みたい」という依頼を受けた。突然の依頼に私は少しばかり驚いた。

話を伺ってみると、どうやらコンピュータールームにいる彼らは、この世界に存在する無数の通貨の価格操作を行っている人間たちのようだった。私はその米国人の依頼に対して承諾も断りもしていないのだが、彼は私をさらに別の部屋に案内した。そこにはまだ人はおらず、その米国人曰く、あのコンピュータールームから二人ほど選抜をし、特別なミッションに従事してほしいとのことだった。私はまだ完全にこのミッションに参画することを承諾していないのだが、残りのメンバーの一人として、アフリカ系米国人のジェイという若者を選んだ。

コンピュータールームからこちらの部屋にジェイがやってくると、彼と私は簡単に自己紹介をし合い、握手をした。結局もう一人の人物を選ばないままに、私たちはコンピューターの前に座った。そこで夢の場面がまた少し変化をした。どうやらこの世界の経済市場の操作をするミッションを進めている建物は、ロケットのような物体の中で行われていたようだ。

数十名いた技術者の中に、一人重大なミスをした女性がいて、その女性は動くロケットの窓から外の海に向かって放り出された。私はただただその様子を窓越しから見ることしかできなかった。両手と手足が動かさないようにされており、そうした状態でその女性は海に向かって落ちていった。ミッションへの参画を依頼した米国人が私の横にいて、「彼女は無事だ。海に落ちた後、両手と手足が動かそうようになり、地上でまたミッションに取り掛かる」と述べた。

その言葉を聞いた時、どういうわけか私も地上にいた。ちょうど彼女が落ちていった海のそばにある波止場のような場所に私はいた。見覚えのない波止場を歩いていると、そこに一台のATMがあった。そのATMに近寄っていくと、偶然にも先ほどロケット内のコンピュータールームで見かけた技術者の一人がいた。

おそらく東欧出身であろうその男性は一目散にATMに向かい、法定通貨か仮想通貨かはわからないが、大量の通貨を実験的に下ろそうとしていた。すると、彼は唾然とした表情を浮かべており、通貨がどうも引き出せないようだった。見ると、その通貨の流通枚数がこの世界でたったの3枚になっており、その事態によってATMが引き出しの拒否をしているようだった。彼はそれを知って、「やられた」と一言つぶやいた。

このミッションは、他の何らかの組織と戦うことを目的にしていることがようやくわかった。私はその男性に代わって、もう一度ATMを操作しようとした。すると私は再び、先ほどの寂れた酒屋の横にある自宅に戻っていて、地下のシャワールームの中にいた。湯垢のついた椅子を新しいものに取り替え、私は湯船に浸かることにした。フローニンゲン:2018/3/19(月)07:45

No.891: Full of Affection

Summertime has begun from today. I'm always aware of that everyday is full of affection. Today will also be replete with benevolence. Groningen, 09:01, Sunday, 3/25/2018

2292. 白い光で構成された書物

午前八時前を迎えると、フローニンゲンの空は一層輝きを増し始めた。辺りが降り注ぐ太陽の光を帯びている。赤レンガの家々に反射する太陽の光を眺めていると、今朝方目覚める直前に白い光

を知覚していたことを思い出した。これは時折起きる現象であり、特に不思議なことではないのだが、今朝方は自覚的にその光を観察するようにしていた。

もちろん、目をつぶっているため、心の眼を通じてその光の様子を観察していた。すると不思議なことに、その白い光の粒は、一旦一つのまとまりをなし、そこから徐々に中心から外側に広がっていった。すると、拡散された光の奥に、一冊の書物を見つけた。その書物は全て英語で書かれており、私が意識を働かせると、それに呼応する形でページがめくられていく。

私はまずその書物の目次を眺めた。目次に刻まれた字が全て白い光で構成されている。見ると目次に刻まれているのは、これまで私が読んできた書籍のタイトルであり、同時にこれから私が読むべき書籍のタイトルであった。過去読んできた全ての書物とこれから読む全ての書物のタイトルが、白い光に包まれたその書物の中に詰まっていた。私は引き続き、その書物のページを意識の作用を用いてめくっていた。

すると、その書物には無数の書籍のタイトルのみならず、要約文も記載されていた。私は食い入るように、白い光で構成された活字を読んでいった。確かに文字を読んでいるという感覚があったのだが、それは見方によっては、私は光を読んでいたことになる。ベッドの上で目を閉じながら、私は気の済むまでその白い光で作られた書物を読んでいた。

そのような形で今日の一日が始まった。今朝方の夢にせよ、光で構成された書物にせよ、今日は少しばかり不思議なスタートを切っている。実際に、私の思考も感覚も、どこか昨日とは異なるようだ。何か完全に終わりを告げ、何か完全に新たに開始されたような実感が沸々と湧き上がる。

まだ断定をすることはできないが、何か非線形的な飛躍のようなものが自分の内側で起こったかのようだ。この世界を見通す認識が、別の階層に至ったような感覚がする。まさにそれは先程知覚した白い光のような認識世界であり、同時に、今書齋の窓から見えるフローニンゲンの澄み渡る空のように透明な認識世界だ。今実感しているこの認識世界について、後ほど文献調査をしようと思う。

本棚にあるどの書籍を調べればいいのかのめどが一瞬にして立った。というよりも、その書籍に視線を向けた時、自分の体が動き出さずにはいられず、その書籍を本棚からさっと引き出し、書齋の机

の上に置いた。今日はまずこの書籍の該当箇所を読み進めようと思う。それが終わり次第、今日は13日目の研究インターンの仕事に取り掛かる。

今日はオフィスに行くことをせず、自宅で分析作業を進めていく。分析に必要なRのコードはすでに書いており、今日はそれを実行し、分析結果をまとめていくことにする。それが済み次第、インターンのまとめとしてのレポートを作成することに取り掛かる。夕方までその仕事に取り組みたい。フロンゲン:2018/3/19(月)08:08

No.892: AI and Dynamic Systems Theory

In the morning, I read several articles on AI and dynamic systems theory. Although those articles are both recent and old, they provided me with ample insights. I'll continue to read other articles today. My propensity exists in philosophical argument on these subjects, AI and dynamical systems theory. Groningen, 10:26, Sunday, 3/25/2018

2293. 縁起を通じて生きること

白い光を知覚する体験、および白い光で構成された書物を読み進めていた体験についてまだ少しばかり考えている。あの体験そのものというよりも、その体験を引き起こした要因について考えている。とりわけ、自らの意識の状態と段階の特性について考えを巡らせている。あの体験の特徴から察するに、自分の意識の状態と段階がどのようなところにあっただけかはいまだ見当がついていない。

その見当を検証するために、先程本棚から引っ張り出した書籍を読み進めていきたい。そもそも、この体験をする前夜から少しばかり自分の意識状態が普段とは異なっているように思えた。そして、それに対応する形で、意識の段階に小さな飛躍が生じているのを感じていた。それは非常に微細な飛躍であるが、確かな移行であるとも言える。

昨夜考えていたことの中で印象に残っているのは、縁起の話である。果たして私はこの二年間の日記の中に、「縁起」という言葉を使ったことがあっただろうか。明確には覚えていないが、ほとんどな

かっただろう。確かに、縁起の意味とほぼ同義である言葉を知らず知らず使っていたことはあるかもしれない。だが、縁起という言葉を確認に用いたことはこれまであまりなかったのではないかと思う。

昨日考えていたことの趣旨をもう一度振り返ってみると、この世界のありのままを肯定する態度には質的差異があるということだった。この世界のありのままを単に字面上肯定する生き方というのは、この世界で生じる現象に付与されている意味の創造に参画しないというものだった。そこには、単にこの現実世界の現象を傍観するような態度しかなく、この世界への積極的な関与というものがない。この世界は、私たちが創造する意味で溢れており、一つ一つの事象はまさにそうした意味の塊である。

そして、意味というのは絶えず生成され、深化の方向に向かっていくことを本質とする。そうした絶え間ない意味の深化に寄り添いながら参画していくことが真の意味での如性を通じた生き方だろう、というのが昨日に浮かんでいた考えであった。

改めて考えてみると、やはりこの点は非常に重要なように思える。この世界で絶え間なく生み出されていくはずの意味が停滞し、その場で滞る時、それは社会病理として立ち現れる。社会的な病理とは、意味の停滞と意味の機能不全から生み出されるものなのではないかと思う。それは個人においても同じだろう。

絶えず絶えず瞬間瞬間に千変万化する私たちと取り巻く世界にあって、意味の創造が停滞することは死活問題である。一夜が明けて改めて思うのは、自分のなすべきことは、意味の創造への積極的な参画なのではないかということだ。縁起を通じて生きるというのは、この世界で絶えず創出される意味の織り物を他者と共に織り続けていくことなのではないか。フローニンゲン:2018/3/19(月)
08:25

No.893: Schemas and Music Composition

While reading some articles about cognition and learning, I realized that I need to acquire more robust and broad schemas for music composition so that I can compose various music at will. These schemas can be obtained from reading and practice. I'll pay a careful attention to schema acquisition in music composition. Groningen, 11:58, Sunday, 3/25/2018

2294. 真善美を通じた生き方と関与

相変わらず気温は低いのだが、今日も雲一つない快晴に恵まれている。昼食前に近所のスーパーに行った時、晴れ渡る紺碧の空を仰ぎ見た。私はその空の広大さと雄大さに吸い込まれそうになっていた。本当に綺麗な青空が空に広がっていた。

紺碧の空は私の想像の及ばないような場所まで広く伸びているかのように思えた。時刻は午後三時を迎え、今なお晴れ間が続いている。この時間帯の太陽の光は強く、窓のカーテンを閉めておかなければならないほどである。太陽の光をめいっぱい浴びれることの有り難さをつくづく感じる。もう本当に春は目と鼻の先まで迫ってきている。あとはこの寒さだけだろう。

結局、今日はこの時間帯までインターンで行っている研究に着手できなかった。午前中は日本企業の協働プロジェクトに向けた準備があり、午後一番でその案件の打ち合わせがあった。そこで話し合われた内容を整理し、あれこれと考えをまとめることに時間を使っていた。研究に取り掛かれるのはようやくこれからである。

ここから数時間は研究に集中したい。先週の金曜日に取り組んでいた分析をすべて終え、その結果を簡単にまとめていく。おそらく今日はそれを行うことができれば十分だろう。インターンで行った活動と研究を振り返るレポートの作成は今週の金曜日に行おうと思う。今回の研究を通じて、やはりRというプログラミング言語を操作することには独特の喜びが伴うことを実感している。

もちろん、私はプログラミングの専門家ではないため、毎回コードを書くことには四苦八苦するが、そうした苦勞すらも喜びに変わるかのような楽しみがプログラミング言語にはある。それは、構築する喜びと創造する喜びに関わっている。また、プログラミング言語を用いることによって分析結果を明らかにしていくことは、社会的な意味を創造することに関与しているという実感が確かにあり、それがまた充実感を私にもたらす。

科学的な仕事や哲学的な仕事、そして芸術的な仕事には深さが宿る。欧州に来て以降、科学・哲学・芸術を通じた仕事が等しく持ちうる堅牢性・建築性に対して感銘を受けてばかりである。それらの領域はお互いに独立しているが、各々の領域における仕事が深まりを見せていくという点につい

ては共通している。そして何より、それらの深まりは普遍性という一点に向かっていくということが共通しているのだ。

気づけば私は、科学・哲学・芸術の全ての領域に携わるようになった。どれも全て出発地点に立っているにすぎないが、これから少しずつそれぞれの領域の仕事を進めていこうと思う。焦ることなく着実にそれを進めていく。どれか一つの領域に特化するのではなく、全ての領域に関与し続ける。なぜなら、真善美の領域全てを通じてこの世界に関与していくことを自分は促されているからである。

一つ一つ自分にできることを着実に積み重ねる形で仕事を深めていこうと思う。真善美が統合的に立ち現れる場の中で生きれること以上に求めるものはなく、それが日々の充実感と幸福感に結びついていく。人は真善美を通じて生きる生き物であり、そうした生き方を通じてこのリアリティに参画していく生き物なのだろう。フローニンゲン:2018/3/19(月)15:21

No.894: Schema Development in Music Composition

It would be intriguing to investigate the developmental processes of schemas in music composition. I can explore this theme from the perspective of developmental science and complexity science. Schemas enable composers to do more complex and elaborate problem-solving. Once a composer acquires and automates a schema, he or she can do a more complex composition task. Groningen, 12:08, Sunday, 3/25/2018

2295. 日記を綴ること・作曲すること

西の空にほんのわずかだけ顔を覗かせている三日月が見える。それは今にも夜の闇に消えていってしまいそうなのだが、確かに三日月として輝き続けている。時刻は夜の八時半に近づいている。一日の活動もあと一時間半ほどになった。

今日は午後から研究に着手し、プログラミング言語のRを用いてあれこれと分析作業を行っていた。事前に立てた三つの仮説のうち、二つは立証されず、一つが立証される結果となった。立証された仮説については興味深いものであるため、また後日機会があれば書き留めておきたい。

それにしても、今この瞬間の静けさは何とも言い難い。風が一切吹いておらず、外の世界は静止しているようである。一方で、私の内側は絶えず運動を続けているかのようだ。外の世界と内側の世界のコントラストを感じながら、少しばかり今日の振り返りを行うことにする。

思い返してみると、先週末の土日はとても強い風が吹いていた。冬を追い払うかのような風であった。その風は単に強かっただけではなく、固有のリズムがあり、春風の躍動とでも言うべきものを私は感じていた。春風の躍動と形容できるような風について今思い出しているのは、もしかすると今この瞬間の外の世界の静けさによるのかもしれない。

今このようにして日記を綴っているわけだが、日記を執筆するということがいかに地に足を着けて生きることを可能にしているかを思う。私の内側には、絶えず超越的な形而上学を求める心があり、それを携えながらも日々の生活を常に地に足の着いたものにしてきているのは日記のおかげだと思う。

日々の生活を通じて、超越的な形而上学的世界について考えを巡らせることを可能にするのも日記の執筆であるし、そこからこの現実世界で地に足を着けて生きることを可能にするのも日記の執筆である。そうした生き方を可能にする手段として日記以上のものを私は知らない。

今日はこれから就寝に向けて作曲実践を行う。改めて、この世界に存在する曲には実に様々なものがあることに気づかされる。今日は本当に一日中ラフマニノフの曲を聴いていた。昨日もそんな一日だった。

クラシック音楽を聴いていると、やはりその世界と学術の世界とを結びつける形で考える自分がいる。今日はふと、曲の中には一流の論文ジャーナルに掲載されるような格式の高いものがある一方、誰にでも親しんでもらえるような庶民的なものがあるというように、クラシック音楽には実に広い幅があるものだと気づかされた。

私は学術論文のような曲は作らないようにしようと誓っている。ごく少数の人しか読むことのできない論文のような曲を作るのではなく、多くの人に開かれた曲を作っていきたいと思う。一編の詩のような曲を絶えず作っていきたい。学術論文のような格式を求めない代わりに、誰にでも共通する人間の普遍的な性質に触れるような作品を作り続けたいと思う。

人間の普遍的な側面を表現するような曲を作る日が来るまで、あと何年かかるのかわからない。それでもそのような曲を作りたいという思いを大切にしたい。自分なりの創意工夫を凝らした短い曲を毎日作っていく。論文の執筆のように曲を作るのではなく、日記を綴るかのように曲を作っていく。

格式ある論文のような曲を作ることのできる人間はこの世界に沢山いる。私にできるのは、そして私が望むのは、日記のような曲を絶えず作り続けていくことだ。フローニンゲン:2018/3/19(月)20:40

No.895: Good Luck

Good luck, analysts and critics. I'll just keep creating something new through my entire life. I'll not spend my time to analyze and criticize others' works, which is a waste of my precious life time. Groningen, 16:20, Sunday, 3/25/2018

2296. 日々の充実

今朝は七時に目を覚ました。この一週間はゆったりと起床することが多くなっている。夜の十時には就寝していることを考えると、随分と睡眠時間を確保していることがわかる。一日の充実感が増すにつれ、その充実感を自分の内側に浸透させるために長い睡眠が必要なかもしれない。

また、単純に日々の生活の中で自分の内側に流れ込んでくる諸々のインプットの量が多く、いくらアウトプットを行うように意識していても、それが追いついていないのかもしれない。毎日の生活を通じて自分の内側に流れ込んできたインプットを咀嚼するために、こうした長い睡眠時間が必要になっているのかもしれない。

今朝は途中で目覚めることもなく、深い睡眠が覚醒の瞬間まで続いていた。質の良い睡眠をこれだけ長く取っているというのも何か不思議だ。やはり日々の生活を通じて自分の内側に流入してくるものを、自分の内側に定着・堆積させることが求められているのだろう。

それにしても、今朝はまた見事な天気である。雲ひとつない快晴。スカイブルーの空がフローニンゲンの街を覆っている。現在の気温は1度であり、一見するとそれは低いのだが、昨日よりも5度ほど暖かく、部屋の中は随分と暖かく感じられる。

私は思わず書斎の窓を開け、早朝の新鮮な空気を室内に取り込むことにした。すると、新鮮な空気だけではなく、遠くの方から聞こえていく小鳥の鳴き声も部屋の中に入ってきた。いや、新鮮な早朝の空気も小鳥の美しい鳴き声も、部屋ではなく私の内側に流れ込んできたのである。これがまさに日々の生活で自分の内側に流入してくるものたちなのだ、とハタと気づかされた。

インプットというのは、単に書籍や論文、他者との対話を通じて得られるようなものだけを指すのではない。風や小鳥の鳴き声も含めた、感覚を刺激する全てのものが貴重なインプットなのだ。また、フローニンゲンという歴史のある街で生活する中で、この土地に堆積された文化と時間というもの、目には見えない形で絶えず私の内側に流れ込んでいる。そうした諸々の流れ込んでくるものと共に私は日々の生活を営んでいる。そして、それらを焦って消化しようとするのではなく、ゆっくりと時間をかけながら咀嚼しようとしている自分が存在しているのである。数羽の白いカモメが優雅にスカイブルーの空を飛んでいく。

一日の仕事をゆっくりと始めるにあたって、今日はサン＝サーンスの曲を聴くことにした。Spotifyに収められているCDをかけてみると、サン＝サーンスの曲の中でも印象的な『死の舞踏』が始まった。この曲は主題と共に、リズム感も気に入っている。そのため、少しばかりこの曲に意識を集中させていたところ、このCDの演奏よりも、上の階に住むピアニストの友人の演奏の方が断然良いと思った。それは技術的にも思想的にもである。とりあえず今日はサン＝サーンスが残した諸々の作品だけを聴いていくことにしたい。

今日はまず最初に、午前中に協働プロジェクトに関する打ち合わせがある。現在協働開発しているプログラムに関する打ち合わせも、いよいよ今日で最後となる。一年ほど時間をかけてここまで辿りついたことに対して感慨深い気持ちになる。一年間の協働はとてもあっという間だったように思う。同時に、この一年間を振り返ってみたときに、確かに一年間をかけて積み重ねてきたものがあったのだということにも気づく。ある別の協働プロジェクトに至っては、それが開始されるまでに一年間の時間を要したものもある。

協働者の方と定期的に打ち合わせをして、ようやくプロジェクトが始動したのも、ちょうど年度末で一旦区切りとなる。それらの協働者の方たちとは来季もご一緒させていただける可能性が高く、来季も今季のように時間の流れとその堆積を感じられるように過ごせることは有り難い。昼食後にも一

件ほど協働プロジェクト関係の仕事があり、「デジタルラーニングと学習環境」のグループ課題に取り組むのは夕方からになりそうだ。今日も一日がとても充実したものになるであろうということを確信している。フローニンゲン:2018/3/20(火)07:57

No.896: Resolute and Graceful Time

Although it was cloudy in the early morning, the sun is gradually showing up. I'll spend resolute and graceful time today, too. Groningen, 11:11, Monday, 3/26/2018

2297. 変奏的な発達プロセス

先ほど、改めて書斎の窓から外を眺めている時、この景色にどれだけ自分は励まされ、生きる活力を与えられているだろうかということを考えていた。書斎の窓から見える景色を眺めていると、この世界が本当に絶えず運動をしていることがわかる。

変化の無限の波が目に見えるかのようだ。絶えず絶えず景色は変わり、一度たりとも同じ景色が現れない。そして、そうした景色を見ている自分自身も絶えず小さな変化を経験している。この内側と外側の絶え間ない変化こそが、このリアリティを生み出しているのだと改めて気づく。自己の内面世界が絶えず変化を宿命づけられているという性質上、その変化と歩調を合わせるように、絶えず外側の世界の変化を感じておくというのはもしかすると非常に大事なことなのかもしれない。

つまり、内側の変化に対して調和をもたらすのは、外側の変化なのではないか、ということである。私は、欧州での生活を送る日々の中で、書斎から見えるこの眺めに助けられている。そこには支援があり、励ましがある。そして、それらは深い安堵感を私にもたらす。

今も目に映っているフローニンゲンのライトブルーの空、赤レンガの家々、裸の街路樹、小鳥たちなどが、全て一つの変化を構成し、それが自分の内側の変化と共鳴しているのがわかる。仮に今後どこか別の場所で生活をするようになったとしても、外の世界の景色が常に目に入るように書斎の机を配置したい。絶えず自然の恩恵を授かりながら自らの仕事に取り組んでいく。

実は以前にも何度か、書斎から見える景色がどれほど自分の支えになっているかについて日記を書いていたように思う。そこで私は、同一主題について繰り返し考えることを意味を掴もうとし始めた。

興味深いことに、仮に同じ主題であったとしても、その主題に向かっていく角度と観点が常に異なっている。喩えて言うならば、変奏曲を作曲するかのように、同一主題について文章を書いている自分がいるようだ。

そしてさらに興味深いのは、新たに生み出された変奏曲は、以前のものには見られなかった差異が内包されているということである。つまり、同一主題について取り上げたとしても、以前にはない角度と観点をもってして、その主題に対する自分の考えや感覚が小さく深まっていることを実感するのである。人間の発達とは、こうした循環的な変奏プロセスから起こるものなのかもしれない。

日記に関しても、作曲に関しても、絶え間ざる変奏をより意識していこうと思う。同一主題を取り上げた時、以前の表現物と何がどれだけ異なっているのかという差異が、自らの内側の成熟を示す試金石となるだろう。多様な主題を扱うという拡散的な運動と共に、同一主題に何度も立ち返るといった深化に向けた運動の双方が大切になる。広く、深く、そして小さく自分の探求を続けていきたいと改めて思った。フローニンゲン:2018/3/20(火)08:16

No.897: Translucent Days

It remains cold in Groningen. Also, it is often cloudy. Even so, I can feel that everyday is translucent and graceful. Groningen, 11:35, Tuesday, 3/27/2018

2298. 終わりからの始まりとライフワークについて

今日のフローニンゲンは申し分のない天気である。昨日も天気恵まれ、晴れ渡る空がフローニンゲンの上空を覆っている。時刻は午後三時を迎えたが、今は気温も上がっており、部屋の中はとても暖かい。今の気温は7度を示しており、この温度であればもう十分過ぎるほどに暖かさを感じる。

快晴の景色を眺めながら一つ一つの仕事に取り組むことは、明日への架け橋を一步一步大切に歩いているかのように感じさせてくれる。とにかく小さな歩を積み重ねていくことの大切さについては、もう繰り返して述べる必要はないのかもしれない。だが、それを繰り返して述べたくなるほどに、日々の小さな歩は尊いのだ。そうした歩を見逃すことはできない。

今日は午前中に一件、午後に一件ほど協働プロジェクトに関する仕事があった。前者に関しては、一年間の時間をかけて取り組んでいたプログラムが無事に完成に向けた最終段階に入り、私が直接的に関与することは今日で最後となった。協働の意義についても繰り返して述べる必要はないのかもしれないが、他者と共に働くことがいかに尊く、意味のあることかを改めて実感する。今年度もあと少しで終わりを迎えるが、来年度も自分にできることを通じて多様な協働プロジェクトに関与していきたいと思う。

昨日は諸々の仕事に専念することで時間が過ぎていき、思うように作曲実践ができなかった。そのため、今日はこれから少しばかり作曲に時間を充てたい。数日前に、自分の内的感覚や内的ビジョンを自由に曲として表現できればと切に願う瞬間があった。今の自分にはまだまだそうしたことが不可能だ。

例えば、先日に日記として書き留めていた縁起について、今の自分はその主題をどれほどまでに曲として表現することができるかを考えていた。縁起に関する内的ビジョンやその言葉によって喚起される固有の内的感覚を曲として表現することは、残念ながら今の自分にはできない。だが、それができるようになりたいという切な願いが自分の内側に炎のように宿る。それを実現するためには、多くのことを乗り越えていく必要があるだろ。

絶え間ない作曲実践と並行して、作曲理論を深く学んでいくことを忘れないようにする。絶えず何か新たな発見を見出していくという意識的な作曲実践を継続させていき、それに合わせて、理論的な学習も行っていく。もはや、日記と作曲を通じて内的感覚と内的ビジョンを形として残していくことは自分の大切なライフワークとなっている。このライフワークを着実に進めていくためにも、日々の鍛錬と積み重ねを怠らないようにしたい。自分のライフワークは本当に始まったばかりだ。フローニンゲン:2018/3/20(火) 15:27

No.898: Organizational Unconsciousness

The more I collaborate with organizations, the more I become interested in organizational unconsciousness. This theme can be investigated by diverse academic disciplines, but I'm especially intrigued by psychoanalysis—which may sound archaic—and systems theory.

The investigation combining these two domains would provide me with new insights about the process and mechanism of organizational unconsciousness and its pathology. Groningen, 18:05, Tuesday, 3/27/2018

2299. 船旅の価値と日欧の文化の深さ

またしてもぼんやりと船旅について考えている自分がいた。船に乗ってこの世界を旅するという思いにどうしてこれほどまでに駆り立てられているのかわからない。それは衝動的というよりも、静かな情熱に満ちた促しである。昨日に一度、そして今日も船で世界をゆっくりと一周することについて思いを巡らせていた。

飛行機でもなく、列車でもなく、船でこの世界を移動することの魅力が徐々に自分の内側に現れてきた。これまでの私は、船旅の存在について知ってはいたが、それに憧れるようなことはほとんどなかった。過去に辻邦生先生が執筆された日記を読んだ時、そこで描かれていた33日間の船旅の様子を非常に興味深く思ったものの、自分が船旅をすることに関しては関心はほとんどなかった。しかし、突如として船旅に関心を示し始めた自分が現れたのである。

船旅の持つ魅力とそれが持つ意味については改めて冷静に考えてみる必要があるだろう。どう考えても、この世界を移動する手段として船での移動は最も遅い。もしかすると、私はその遅さの中に大切な意味と価値を見出しているのかもしれない。この有限な生をゆっくりと味わいながら進むこと。

有限であるから急ぐのではなく、有限である生があたかも止まってしまうかのように、生を充実感で満たしながらゆっくりと生きること。そうした生き方の鍵を船旅が持っているように思えてくる。今からおよそ60年前に辻先生が日本からフランスに向けて33日間かけた船旅についての日記をまた読み返そうと思う。

昼食後の仕事がひと段落し、先ほどいつものように20分ほど仮眠を取っていた。大抵いつもは覚醒意識(グロス意識)から夢見の意識(サトル意識)または夢を見ない深い意識(コーザル意識)に移行するのだが、先ほどは思考が活性化しており、グロスの意識のまま20分が過ぎた。

仮眠中私の脳裏に浮かんでいたのは、個人と文化的堆積との関係であった。本当に私は、日本や欧米で生きて行くための出発地点に立ったにすぎないことを知る。欧米で暮らしてきた年数は六年ほどであり、それは多くも少なくもない。今この瞬間に気づくことは、ようやく私は、日本の文化の深さや欧米文化の深さについてわかり始めたということである。

いや、正直なところ、私はまだ米国文化の深さについては全くわかっていないと言えるかもしれない。米国文化の深さに気づくことができるほどに、当時の私は成熟をしていなかった。今、欧州での生活を通じて、欧州の文化の深さというものが巨大な伽藍のように目の前に立ち現れている。おそらく、欧州の文化の深さが気づけるところにまで自己が成熟を遂げ始めたことが起因としてあるだろう。

しかし、真に欧州の文化の深さを掴むには、全くもって今の自己の成熟度合いは不十分である。欧州の文化の高さまで自己を高めていく必要性が自らに課せられているのを実感する。この点が仮眠中に脳裏をかすめていたことの一つだ。それに加えて、日本文化の深層的な深さについて理解し始めたのも、本当にごく最近になってからのように思う。

これはおそらく、自分の中でようやく日本の文化を客体化するということがなされたことを示唆しているように思える。日本の文化的堆積を理解するためには、ある意味文化を相対化する経験と自己の成熟が不可欠であったように思う。一体、どれほどの日本人が自国の文化の深層的な深さを理解しているだろうか。その文化の高さの前に愕然とするような気持ちであったり、それに押しつぶされてしまうかのような感覚を持つ人は少ないのではないかと思う。

しかし、そうした感覚を持つというのは、その人が真に日本文化の高さや深さと相対峙するような成熟度に至ったことの表れなのではないかと思うに至っている。今の私は、欧州や日本の文化の深層的な深さというものが、過去何千年にもわたって幾多の人間が積み重ねてきたことから生まれたのだということが明確なものとなり、その重みを実感し始めているという段階にいる。

この世界で生きることの出発地点にようやく立ち始めたのかと思う次第である。バッハのゴルトベルク変奏曲が鳴り、仮眠から目覚めた。フローニンゲン:2018/3/20(火) 15:53

No.899: Spirituality and Music

I read the article: “A conceptual study of spirituality in selected writings of Émile Jaques-Dalcroze (2017).” This article was quite insightful to me in that it expanded my view of music in terms of spirituality. Also, it reminded me of the origin of my academic exploration, which involves human spirituality. I realized that I would start to investigate philosophy of music from the perspective of spirituality. If I could integrate developmental psychology and philosophy of music in my academic exploration, that would enrich my life. Groningen, 19:28, Tuesday, 3/27/2018

2300. サン=サーンスの音楽と差異について

今日も夕方の時刻を迎えた。午後六時に近づき、これから夕日が徐々に沈んでいくことになる。フローニンゲンの日照時間は随分と伸びた。今日は本当に一日中サン=サーンスの曲を聴いていた。特に、ピアノ協奏曲を長く聴いており、その美しさには思わず仕事の手を止めてしまうことがあった。

その時、曲の世界の中に自己を委ねてみようという意思を生み出すような促しをサン=サーンスの音楽の中に感じた。今すぐにではないが、近いうちにサン=サーンスのピアノ曲の楽譜を購入しようと思う。彼の音楽にも範を求めたいという気持ちが高まっていく。作曲についてはとにかく焦らずに進んでいくことが肝要だ。

音楽院に在籍しているわけでもなく、師についているわけでもない私は、自由に作曲実践を行えるのは確かだが、時に自分の歩みの進度がわからないことがある。そうだとすると、その進度に対して焦る必要はない。また、自分の現在の作曲技術に過度に絶望しないことも大切だ。とにかく焦らずに、着実に作曲実践を重ねる中で技術を少しずつ涵養していく。

夕暮れにこれから向かっていくフローニンゲンの夕日を眺めながら、そういえば午後の仮眠中に突如として過去の記憶が蘇ってきていたことを思い出した。それは幼少時代に飼っていた金魚とカナヘビの死にまつわる記憶だった。両生命の死が自分の心と体に巻き付いているような妙な感覚があった。私になぜ今日の仮眠中にその二つの生き物に関する記憶を思い出したのかはわからない。

だが、二つの生き物の死に直面したという幼い時の体験は、今の私に何か言い尽くせない影響を与えているようなのだ。

昨日は協働者の方との対話を通じて、差異について考えるきっかけを得た。対話の中でそれについて触れたわけではないのだが、対話の後に私の中に浮かんでいたのは差異に関するテーマだった。

これまでの日記で再三書き留めているように、差異は私たちの認識の光が当てられることによって新たな差異を生み出していく。もちろん、私たちが意識しないところで絶えず生み出される差異というものも存在しているが、私たちの認識世界を真に深めてくれるのは、こうした自らの認識を用いることによって発見される差異だけのように思える。

というのも、私たちの自己は一つのダイナミックシステムとして絶えず差異を生み出し続けているのだが、その差異に認識の光が当てられない場合、差異は谷底の往復運動をするだけであり、次の状態に移行して行かないからである。まさにそれは、システムがアトラクターポイントの前後を行き来するだけであり、その地点に留まっている姿を示している。システム自身が次の状態に移行するためには、差異を次の状態に押し上げていくような実践が必要になる。

その実践の一つがまさに、自らの内側に生じる差異に気づきを与えていくことだと思う。差異に気づきを与えていくという小さな実践の積み重ねが、システム全体を次の状態に導いていく。

そういえば昨年に読んだ論文の中に、このあたりの考えにつながる内容が書かれていたことをふと思い出した。システム内のエントロピーの増大と次の状態にシステムが移行した後にエントロピーが一時的に減少することについて記述された論文だったように思う。フローニンゲン:2018/3/20(火)

18:08